恋のドリンクは…

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋のドリンクは…

【Ｎコード】
Ｎ８４６９Ｆ

【作者名】
彩瀬姫

【あらすじ】
ＢＬ。男に恋をした安達咲哉。７年前から好きだった幼馴染に恋人ができたと聞いて、ショックだった咲哉。その勢いで胡散臭いドリンクを買ってしまった。その名も「何でも悩み解決ドリンク」。ドリンクを飲んだ咲哉に異変が起こる――？

□プロローグ（前書き）

※ジャンルを「恋愛」から、「コメディー」に変更しました。

□プロローグ

『何でも悩み解決ドリンク』
飲んだ次の日に、悩みは解決！！
一回、一本。

胡散臭(うさんくさ)いドリンクをネットで買った。
俺は相当やつれてたんだと思う。
俺――安達咲哉(あだちさくや)、同性しか好きになれない体質に生まれた男。
自分がそうだと気づいたのは、7年前。俺が小学校4年の時だった。
好きな相手は幼馴染――桜塚蓮(さくらづかれん)

今現在好きな人でもある。
この間、蓮に彼女ができたと話を聞いて、それはそれはショックだった。
だから、俺は今日。
この胡散臭いドリンクを買ってしまったんだ。
やけ酒ならぬ、自棄(やけ)ドリンク？

――これを飲んだだけで悩みが解決できるなら、どんなに楽なんだろう。

そう思いながらドリンクを飲んだ。

「ゴクゴク」

味はべつに不味(まず)くない。

似てるっていえば、オレンジジュースの味に似てると思う。
まぁ……。
これは本当に慰(なぐさ)めにしかならないだろう。
そんなことを考えながら、俺は眠りについた。

次の日、俺が大変なことになってることを知らずに……。

□第一話

う……。ねむ！
つーか寒すぎる。

寒すぎて不意に、目を覚ます。

外はぽつりぽつりと、雪が降っている。

俺は高校生一年で、一人暮らしをしている。
親はいるんだけど、親との仲が悪くて、自分から家を出た。

まぁ、家を出たといっても、アパート代は親が払ってくれてる。

あぁ学校か～面倒くさいな。
蓮もいるだろうし。蓮の彼女もいることだろうし。
はぁ。ヤダな……。
いっそのこと、登校拒否したい……。

と、思いながらも支度をするために洗面所に行った。

顔を洗って、歯磨きをして。
そして眼鏡をかけるっと。

よし支度完了
と顔を鏡の方に向ける。

えぇ……？

俺は自分の異変に気づいた。
眼鏡がなくて気づかなかったのだろう。

俺の、俺の。

俺の髪が……

長くなってる！！！！

短髪だった髪が、肩よりも長くなっている。
髪に触ってみるが本物だ。

…そして、もう一つ気がついたんだけど……。

何か胸が重いような……。
か、勘違いだよな……あはは。

……。

おそるおそる触ってみると。

ぎゃーーーーーーーーーーーー！！！！！！

む、む、胸が……。ある！！！
男の俺に胸がある！！

もしかして、もしかして……！！
と思い、あそこに触ると。

……

……

……

……な、ない。

何度も確認するが…ないものはない。

も、もしかして俺……。

女になっちゃったぁ！？

□第二話

――どうして女になっちゃったんだぁ……。

俺は、混乱しながらも考える。

えっと……。
何かしたことあったけな……。

昨日は、確か学校へ行って。

腹がすいたので食って。
授業中に腹がすいたのでお弁当を食って。
そのあとは眠くなったので、授業中にそのまま寝て。
昼食になっても、眠かったので眠り続けて。
午後の授業もそのまま……。

っと、そんなことはどうでもいい！！

その後は。
家に帰って、晩御飯を食って。
ドリンクを買ったので飲んで、寝て。

！！

そうだ。『何でも悩み解決ドリンク』を昨日、飲んだんだ。

――じゃあこれが、悩み解決の結果か？

って呑気なこと言ってる場合じゃない。

このままだったら学校に行けない。

こんな恰好で学校行ったら、絶対変人に思われるって！！

蓮にも嫌われそうだ……。

とにかくドリンクに、説明書があったはずだ。

それを読んで、この体をどうにかしないと。

急いで説明書に、目を通し始めた。

えぇっと何々……。

このドリンクは一回一本。

次の日には悩みが解決。

※注意

飲みすぎ厳禁。

あまり変なことを悩まないように！（それってどうゆうこと？）

……警告欄にこんなことが書いてあった。

『このドリンクが原因で、地球がひっくり返ったとしても保証いたしません』

……。

どうすればいいんだ……俺！！

□第三話

……。

……真面目にどうしよう！！！

えぇ…だって。
このままだと、女のまま過ごさなきゃならないってことだよな！？
嫌だってそんなの。
男が女になるなんて。
まじありえねぇーーーーーーーーーー……。

……そうだ！作った会社に電話して解決策を探してもらおう。

電話番号が書いてあったよな……あった！
よしかけるぞ。

ピポパポ　ピポパポ

……トゥルルルル・・トゥルルルル

よし繋がった。
後は電話に誰かがでればっと。

「……トゥルルル、ブチ…はい、もしもし」

でた！！人が出た。男の人が出た。

「あのすみません。あの……「何でも悩み解決ドリンク」を作ったのは……」

俺が言い終わる前に納得したように頷く。

「あーはいはい。そうですよ。そちらのものは私の会社で作っています。で、何か問題がありましたか？」

受け答えになれてるのか、問題があったの察知したようだ。

「あっはい。そうなんです」

「で、問題というのは……」

――俺が女になったことを説明した。

悩みは何だったのかと聞かれて、最初は言えなくて黙ってしまったが。

解決方法を探すためには教えてくださいと言われたので、いやいや答えた。

それを聞いていた男の人は、きっぱりと言った。

「無理です」

「それでは困るんですが……」

「こちらも無理なんです。そういう問題を解決するドリンクはまだ開発途中でして……」

それだったらなんでそんなもんを売ったんだよ！！
っと言いたいところを抑えて、平常心で答える。

「何とかなりませんか？」

「……1つだけあります。これは解決策というより聞いた話なんですが」

「それでいいです。教えて下さい！！」

何でもいいから、さっさと教えろよ！！

「悩みがしっかり解決できたら、元に戻るらしいんですよ」

しっかり解決？？
どうゆうことだ？？

「ドリンクではなく、自分自身で悩みを解決すれば戻るみたいなんですよ」

なるほどね。
確かに。自分で悩みを解決すればいいことだし。
そうゆうことか……ってはぁ？
解決できないからこれに頼ったんだよ。俺は！！

「このドリンクは、慰めみたいなものですし」

男の人は平然と答えた。

「慰めっていうか、それだけじゃすまない気がするんですけど…」

慰め程度じゃない。男が女になったってことが、どこが慰めだって言うんだ。

「無理なものは、無理ですね。それに説明書に書いてあったでしょ？『このドリンクが原因で、地球がひっくり返ったとしても保証いたしません』って」

じゃあ失礼します～！！っと言って電話を切られてしまった。

無責任だろ！！

あぁ～！！どうしよう！！

このままだったら、学校に行けない……。

つーか蓮に会えないって。

はぁ……。

ため息が出てきた。

本当にどうしよう。

このままじゃ、外にも出れない。

……。

……あっ！？

パッ、といいことを思いついた。
女になっちゃったってことは。
≪蓮にアタックできるってこと！！≫
悪い方向ばっか考えるから、いけなかったんだ……。
それにこれが悩み解決の結果なわけだし。
いい方向に考えないと。
いいことに、明日からは冬休みだ。
今日は終業式だけだし、休んじゃえ！
よし！
明日から蓮にアタックしまくろーーー！！
と咲哉は意気込んだ。

□第四話

――さっそく蓮にアタックするための準備に取りかかった。
最初は、恰好(かっこう)からということで、女物の服を着よう。
さすがに、俺は女物の服なんか持ってない。
……しょうがないから、妹に服を借してもらえるよう電話した。
あまりにすんなりＯＫをもらってので驚いた。
しかも妹が服を届けてくれると言うので有難い。
このままじゃ、外でれねぇーし！！
――妹とは、年は一つしか変わらない。
ショックなことに背もそんなに変わらない……。
中学校の時に牛乳をたくさん飲むべきだった……。
でも、俺が大きかったら妹の服を着ることができないから、これはまぁ、良しとしよう。
ピンポーン
あっ、きた？

玄関に向かうと、妹の葵がいた。
俺の姿を見て、呆然としている。

「ええっと、どちらさまで……」

それは葵の言う台詞ではない。と言いたいところだが。
この俺を見た後ならしょうがない。

「俺だ。咲哉だ。お前の兄だ」

「……」

それを聞いても、まだ葵はぼーっとしてる。

一応、俺が女になったということを電話で話しておいたが、まだ信じられないようだ。
俺自身も、信じられなかった。
でもこれは本当なんだ。

「まぁ、入れよ」

そう言って部屋にすすめた。

「もう一回言うけど、俺はお前の兄の咲哉だ」

「うん……わかったけど……何かお兄、可愛くなったね」

感心するように言われた。
というか、さっきから気にしてたのはそこか？
俺が女になったというより、そっちが気になるのか？

「まぁ。信じてくれたならいいけど。あのさ、俺に似合いそうなのあった？」

「うん。ていうか、お兄の女の子姿見てなかったらから、どれが似合うかわかんなかったけど、どれにも似合いそう！！着せ替え楽しみ～」

俺は、着せ替え人形か！？
そんな突っ込みは置いといて、本題に。

「どうすればいいんだ？」

「うん……。どうしようか。とにかくスカートはこう。スカート！」

「ス、スカート！？い、嫌だ。せめてジーンズにしようぜ」

そう言うが葵は引き下がらない。

「お兄！！お兄からあたしに頼んだんだから、おとなしくしててよお！！」

「ぎゃーーーーーーーーーーー！！」

――――３０分後。

「うん。いい！！超お似合いだよお兄」

「は、恥ずかしい……」

スカートにブーツ。ネックレスにブレスレット。
すべて女ものだ。
俺が思っていたのとはちょっと――だいぶ違ってた。

……恥ずかしすぎる。
男がスカートなんて……。
しかも、スカートってなんかスースーするし変な感じだ。

俺の反対に、葵は満足そうだ。

「お兄がそんなに可愛くなったら、蓮さん惚れちゃうかもよ？」

揶揄（やゆ）するような口調で言った。

俺が蓮のことを好き、って言うことは葵には、とっくに知られてしまっている。
俺から言ったわけではなく、葵から「蓮さんのこと好きでしょう？」と言われたのが。
ばれたので隠さなくてもいいと思ったので、おもいきって言ってしまった。

「お兄。後、歩き方とかも練習するからちゃんと見てよね」

そんなのもあるのかよ！？
別にいい、と断ろうとしたが。

「お兄。言ったよね？全部私に任せるって？」

「そうだけど……」

「なんか言った？」

怖！！
何か今日の葵、怖！！
逆らってはいけない雰囲気だ。

「いいえ。何でもございません」

「それじゃあいくよ！！」

それから、葵先生による、「俺が女の子らしくなるためレッスン」が開始した。

□第四話（後書き）

次回、やっと蓮君が登場します。

□第五話

昨日は、葵にいろいろみっちりと仕込まれたので、女っぽくなることができました。

ハッキリ言って複雑……。

まぁ……頑張ります！！（誰に言ってるんだか）

――昨日、蓮から「なんで休んだんだ」とメールがあった。

『女のからだになってしまったからです』

『しかもその格好でお前に告白する特訓をしていたからです』

なんてことを言えるはずもなく、ちょっと調子が悪くって曖昧に答えておいた。

さっそく向かうのは公園。

いつも蓮と行く公園だ。

長期休みになるといつもこの公園に二人で行った。だから今日もここに蓮がいるはず。

そう思って、俺は行くことにした。

公園に行ってみると……。

そこには思ったとおり、蓮がいた。

でもそこにいるのは蓮だけではなく、蓮の彼女も一緒だった。
彼女と一緒にラブラブデートかよ。
そんな考えに一瞬傷つきながらも、俺はさっと木の陰に隠れる。
この格好だからばれることはないけど、反射的に隠れてしまった。
…何を話しているんだ？
蓮達がいる方に耳を傾けるがよく聞こえない。

――それから１０分ほど経った。
何か俺、ストーカーぽくないか？！
と思いながらも、蓮とその彼女を木の陰から見ていた俺。
全然声が聞こえないから、蓮達に少し近づくか、と思った瞬間。
突然、大きな声が飛んできた。
「どうしてわかってくれないんだ！！」
「それは蓮がいけないんでしょ！！」
――あれ？何か険悪な感じか？
二人は何か言い争い、喧嘩をしているようだ。

「もう蓮なんか知らない！！」

パシっ！！

蓮が彼女に頬を打たれた。

痛そう……。

そう思っているうちに彼女はどっかへ行ってしまった。

ひとり残された蓮はひとり淋しくベンチに座った。

何かを考え込む蓮の姿。

淋しそうで、悲しそうで。

その姿を見た俺は、つい木の陰から出てしまった。

話しかけて慰めてやりたかったから。

俺の視線に気づいたのか、蓮はこっちを向いた。視線があっただけでドキドキしてしまう。

俺はそっと蓮に近づいた。

蓮の座っているベンチに俺は、ゆっくりと腰をかけた。

□第五話（後書き）

何か中途半端なところで、終わってしまいました。
続きは次回で。

□第六話

———慰めてやりたい！！

そう思ってベンチに座ったが、俺は男の姿をしている咲哉じゃない。
と、今気づいた。（遅い
とにかく近くに行ったんだから、話しかけるチャンスだ！！

「……」

「……」

……話が思いつかないし、なんか気まずい。
真面目にどうしよう！！
そうぐるぐる頭の中で考えていると、蓮から声をかけてきた。

「今の見ていたのか？」

「……」

すぐに答えられず、下を向きながら黙ってしまう。
それを「ＹＥＳ」と受け取ったらしい蓮は、話を続ける。

「だらしないよな、俺。こんなみっともないところ見られて」

「そんなことはないと思います」

今度は蓮の顔を見ながら言った。本当は、
≪そんなことねぇーよ！！あの女がわりーんだ！！
と言いたいところだが、昨日葵に言われたとおりに敬語で話す。
平常心を持って。今の自分は咲哉じゃない。女の子なのだ。

「優しいな、あんた。名前は？」

そういえば名前は決めてなかったけ？ど、どうしよう！？
混乱した咲哉はアタフタしてしまう。

「えぇ…っとあのぉ…その…」

「？」

「咲く…咲く…桜子（さくらこ）です」

なんかの呪文かよ！！と突っ込みたくなるが、パッと出た名前が普通なものでよかったと安心する。

「ありがとな。なんか、励ましてくれて」

「いえ、大丈夫で…す」

お礼を言われるとなんか悲しい。
彼女に振られたのがそれほど辛かったと言ってるようなものだから。
胸がズキズキ痛む。

突然、蓮は何か思いついたらしく、パッと笑顔になった。

「そうだ！メアド教えてくんねぇ？また会いたいしさ」
はい、っと口を出しそうになるが、いったん思いとどまる。
俺の番号教えたら俺の正体がばれる。
「ご、ごめんなさい。私、携帯持っていなくて……」
「珍しいな。携帯持っていないって」
「そうですよね」
蓮は、何か考え込むように腕を組んだ。
しばらくの沈黙の後、ゆっくり口を開いた。
「じゃあ、またここに来な。俺、いつでもここにいるからさ！」
突然の申し出に咲哉は笑顔がこぼれる。
「いいんですか？」
「おう！俺の友達インフルエンザみたいで、遊べねぇーんだ。だからちょうど話し相手できていいし」
「あぁーそうなんですか」
俺の代わりの話し相手かよ……。
なんか複雑だな。
……でも、また会える約束ができた！！

「それだけでも嬉しい」と浮かれる咲哉であった。

□第六話（後書き）

更新遅れてすみません。
話の内容を、あまり考えていなくて……。
できるだけ早めに更新できるように頑張ります！！

□第七話

次の日……

「おはようございます」

「あぁ。おはよう。今日も来たんだな」

咲哉は今日も公園に来ていた。そこには蓮がいて。

「はい。私も冬休みは何をしていいのかわからないもので……」

「そうだよな。勉強なんてやってられねぇーよ」

いつもと同じ蓮だ。

そう思うとなぜか笑みがこぼれた。

「何笑ってるんだよ？」

不機嫌そうに蓮は言った。

「別に何でもないですよ」

「そうか？まぁーいいけど」

照れくさそうに頭をかく姿がカッコいい。

いつも見ていたけど、立場が違うとこんなにもドキドキするんだなぁ……。

咲哉は女の子になったことで違う視点で、蓮を見ることができた。
蓮は俺の正体なんぞ知らない。
――それでいい。
咲哉としてじゃなくて、桜子としてみてくれれば。

「蓮さんは、この冬休み何か予定ってありますか？」

「あぁ？そうだな……お正月にばーちゃん家に帰るくらいしかねぇーな」

そう言うと思った。
咲哉はそれを予想していたかのようにニヤリと笑った。

「蓮さん、今日が何の日か知ってます？」

「今日かぁ？あれだろあれだろ」

そう！あれ！
咲哉はその答えに期待する。

「あれだ。キリストの誕生日の一日前」

「と言うことは！！」

「あれだろ？」

「それです！」

「あぁーそっかそっか。やっぱりあれだよな、あれ！！」

一人納得したように、手をポンとたたく蓮。
しかしなぜ蓮はさっきから「あれ」としか言わないんだぁ？

「あれじゃ分かりませんよ？」

そう言うと蓮はあからさまにムッとした。

「お前、意外としつこいな。なんか咲哉みたいだ」

「えぇ？」

その言葉にピクッと反応した。
俺みたい、だって？
まぁーそりゃ俺だから俺みたいなのは当たり前だけど。
何と言うか心臓に悪いな、俺の名前を出されると。俺の正体がばれたんじゃないかって思うし……。
蓮は続けて咲哉の話をする。

「咲哉ってのは、俺の幼馴染なんだけど、インフルエンザにかかったらしくてさ大変なんだとよ」

———ごめん蓮。
心の中で、蓮に謝る。
しょうがなく嘘をついたけど、やっぱり罪悪感がある。

「まぁ。アイツのことだから大丈夫だ」

蓮は遠くの何かを見るかのように優しく微笑んだ。
あまり見ない微笑んだ顔。
それが無性に嬉しくてたまらない。

「それより、今日はクリスマスイブですよ！！」
そう、今日はクリスマスイブ。
今日はちょっとしたデートに蓮を誘うと思っているのだ。
「何かご予定ありますか？」
「ありました」
……えぇ？
その言葉に咲哉はショックを受けた。
だってさっきなにも予定ないって言ったのに……。
しょげてると、蓮は咲哉を不思議そうに見た。
「何落ち込んでんだ？」
「別に何でもないです」
慌てて咲哉は首を振った。
こんな顔してたら好きだとばれる！！（早とちりだと思うけど）
「で、今日は俺に何か用があったのか？」
「い、いえ。そうじゃなくて……」
「あぁ？」
咲哉が口ごもると、蓮は続きを追求してくる。

そうだった。蓮はこうゆう奴だ。
中途半端ということが嫌いで、何が何でも追求しないと気がすまないたちなのだ。
……うぅ。恥ずかしいけど言ってみなきゃな。。

「あの、今日ちょっと出かけませんか？とお誘いしようと思ったんですけど、先約があるなら仕方ないです」

落ち込んだ様子を見せないようにそう告げた。
すると、蓮は「何だそんなことか～」とため息をつく。

「俺言ったよな？【ありました】って。元々はあったけど、今はない。だから、そんな顔をするなよ。出かけようか」

蓮は咲哉の頭にポンと手をのせる。

優しくて安心する手。

――暖かい……。
冬で寒いから余計に温かく感じる。
今はこのままでいたいな。

――――ただ蓮の温もりを感じていたかったから。

□第八話

ドク…ドクッ…ドクッ

心臓の音が聞こえるぐらい。咲哉は緊張していた。
今日は実は初デート！！（咲哉自身がそう思ってるだけだけど…
蓮と二人きりで。
さっきまで二人でいたんだけど、蓮が支度してくると言って一旦別れたのだ。
友達として咲哉として遊びに行くのよくあったけど、駅前の噴水で待ち合わせ。
本当のデートみたいだぁ！！
ドキドキしずぎて、本当に心臓が飛び出しそうだ。

まだかな？蓮……

時計を見ると、待ち合わせ時間まであと5分。
多分あと5分で来ないと分かっているけど、ドキドキしてしまう。

実は蓮は約束の時間に、絶対と言ってこない。
俺との約束の時間、一回だって守ってくれなかった。
でも、約束の日は絶対来る。それだけは、確かだ。

「蓮……」

自然に蓮の名前が出てしまった。
うわぁ……。なんかすごく恥ずかしい……。
早く来てほしいと言う気持ちと、ちょっと待ってっ！心の準備が整ってから来てという二つの想いが交差する。

まあ、どっちにしろ来てほしいものは来てほしいのだけど……。

ドク…ドクッ…ドクッ

ドキドキが速くなってくる。

「蓮……」

もう一度彼の名前を呟いた。その瞬間誰かから肩を掴まれた。

「ギャーーーーー」

「煩いな…大声で騒ぐな」

えぇ？蓮？

俺は正直に驚いた。時間どおりに、性格には時間よりも早く来た。

やっぱり女の子に優しいのかぁ？

友達の俺にはいつも時間破るくせに……。

そう、自分に嫉妬しながらも、早く来てくれたことが嬉しい。

「ごめんなさい……。突然だったので驚いて……それで……」

ゴニョゴニョッと言うと、蓮はなぜか納得したように頷く。

「そうか、それは悪かったな。何か背丈が親友と似ているから、手を置きやすくてな」

はい…。はっきり言いますと。

本人ですっっ。

女の子になっても、やっぱり中身が同じだから、扱いまでもが同じになってしまうのだろうか。

それにちょっとショックを受けてみたり……。
ちょっとした俺の変化に気付いたのか、蓮は話を進める。
「じゃあ、行くか？えっと桜子さん？はどこに行きたいんだ？」
「えっと、遊園地です」
デートの定番と言えば遊園地！！
遊園地と言う言葉を聞いた蓮は、限りなく嫌な顔をした。
「あの……駄目？ですか？」
蓮が遊園地が嫌いなのは知っていた。
でもどうしても行きたかったのだ。遊園地に蓮と二人っきりで。
葵に習った、上目遣いで何とか迫ってみる。
上手くいくのか、俺的に心配だったが。
「……分かった…。少しだけだからな」
どうやらこの作戦は成功したようだ。
その言葉に笑みがこぼれる。
「じゃあ行きましょうか」
近くにある遊園地の名前を言ってそこに行こうと歩き出した途端、
蓮は目を輝かせた。
どうしたのかと問うと、嬉しそうに蓮は言った。
「此処から走って行くぞ」
「……へぇ？」

何を言い出すかと思えばそれですか！？

「走る練習になるし、ちんたら歩いても寒いし」

――蓮さん……もう少し雰囲気考えません？

男女二人っきりなんだから、ちょっとくらい甘い雰囲気になってもいいと思うんですよ……俺的に。

咲哉はすっかり桜子になりきっていて、大事なことを忘れていたんだ。

蓮は走りたがり屋だということを……。

何処に行くにしても走って行った気がする。映画の約束をするときは、大抵蓮が遅れてきて、映画の時間に間に合わないと走ったり。

その他に、学校に一緒に行く時だって、蓮が遅れてきて遅刻しそうになり走ったり……。

「ほら、行くぞ」

気は乗らないが、走って遊園地に行くことになった。

走って行くスピードが速すぎて、蓮に追いつかない。

「蓮さん…待ってぇ…」

「何ちんたらしってるんだよ。早く来いよ」

追いつかない俺を見て、蓮は楽しそうに笑った。

俺がスカートをはいていることもあるけど、それ以前に蓮がマジに走っているからだと思う。

――蓮。女の子に振られる理由はこれだと思うよ……。

咲哉は自分が蓮に恋しているのも、どっかに置いておいて、自嘲気味に笑った。

□第九話

「はぁ……はぁ…」

なぜ遊園地行くだけで、息切れしなければいけないんだ…っ。

と泣きたくなりました。

何とか遊園地前に到着。

「桜子って。結構足、早いんだな」

「えぇ、あっはい。走るのに慣れていまして…」

「陸上部にでも入っていたのか？」

お前が毎回、俺を走らせるからだよっっ！！

と心の中で怒るが、本人は知らず……。

「えぇ…ちょっとですけどね」

蓮は、そうかそうかと頷いている。

それより俺的には遊びたいんですけどね…と目を向けるが、やっぱり蓮は気付かず。

「それじゃ、行くか」

「はい」

やっと本題。

俺の顔は自然と笑みが浮かんでいた。

初めてのデート（と勝手に思い込んでいる）と言ったらっ、やっぱり・・・

お化け屋敷だろうっっ！！

勝手に妄想。

キャーとか言って、ちゃっかりくっついちゃうお馴染のアレです。

男がそんなこと考えているのか？と恥ずかしくもなるが、今の俺は女だ、と恥を捨てた。

「お化け屋敷がいいです」

「お化け屋敷かぁ……分かった」

「はいっ」

早速お化け屋敷に入る。

隣の蓮を見てみると、平気そうに歩いてた。

「あの、蓮さんはお化け屋敷って来たことあるんですか？」

「うん？あぁ…お化け屋敷かぁ……ない」

やっぱり蓮は、こういうところに来たことないんだな。

勝手に納得。

「あぁ！エレベーターがありますよ」

「ホントだ」

こういうのって大体、エレベーターにお化けが隠れてたとかあるんだよな。

実は俺、お化け屋敷が好きなので、どこにお化けがいるのか熟知している。

何度来ても面白いからいいけど、怖いと思ったことが実は一回もない。

だから、お化けが出てきたときにキャーと言ってちゃっかり抱きつこうっかなと思ってるんだけど……
どうやら小さな夢は儚く散ったようだ。

「うわぁ……」

蓮はお化けが出てくる度に変に感動した声が漏れる。
そんな蓮に俺はくっつくことできず、ただ隣を歩いていた。

お化け屋敷作戦（勝手に名付けた）失敗？

はぁ……と溜息をついたときだ。

「ぎゃあっ」

横から、突然お化けが顔を出したのだ。
それに驚いたのは俺ではなく、その他の客でもなく、蓮だった。

「えぇっ蓮さん？」
「あぁ…っ？なんでもねぇーよぉっ」

蓮はバツが悪そうに言葉を投げ捨てる。
あれ？と視線を下に向けると、蓮の手が震えていた。
――蓮。もしかして怖がってる？
さっきから変に感動してような声を出したのは、怖がっているのを隠すため？
そう思わざるえなかった。

「あの、蓮さん。大丈夫ですか？」
「はぁ？大丈夫に決まってるだろ！？」

大きく声を上げるときは、蓮が何か無理をしている時だけだ。
親友の俺には直観的に分かった。
「大丈夫ですよ。ほら、こうすれば怖くないでしょ？」
俺は無理矢理、蓮の手を握った。
すぐに離されるかもっと思ったが、蓮は俺の手を離さなかった。
逆に強い力で握りしめてくる。
「悪いな」
ぶっきらぼうにはなった言葉はきっと照れてるからだ。
「はい」
ずっとこのまま手を繋いでいたい。
そう思うのは我儘だろうか？
寂しそうに彼の顔を見上げると、優しく笑ってくれた。
この姿になってから、初めて蓮が俺に向けて笑ってくれた気がした。

□第十話

「あの、蓮さん。手大丈夫ですか？震えてますよ？」

お化け屋敷を出て1時間。

蓮はまだ体が震えていた。その証拠に乗り物に乗っている以外のときは蓮から手を握ってくる。

さっきまでそれをからかっていた俺だが、ここまで来ると本当に心配になる。

「いいか。あんなものはもう一生乗らないからな」

「えぇ？」

「ゴーカートだ。ゴーカート。あんなにスピード出して転んだらどうするんだ？」

その言葉に呆然としてしまう。

そんなにスピード出したつもりはないんだけど……そんなこと言ったらジェットコースターすら……

あれ？もしかして蓮……。

「あの……蓮さん。もしかしてですけど、聞いていいですか？」

俺は隣にじっと突っ立っている蓮に問いかけてみることにした。

「なんだ」

「もしかして、蓮さん絶叫系も駄目ですか？」

さっきからそういえば絶叫系を乗っていないと思って、ジェットコースターに乗ろうと誘ったのだが、固まって動かなくなってしま

ったのだ。

「駄目じゃない。苦手なだけだ」

なんて頑固な・・・。

俺は小さく溜息をつく。

何となく分かった。蓮は全経系が苦手だから遊園地に行かなかったのだ。

プライドが高いのは知っていたが、絶叫系が駄目だということを幼馴染の俺にまで隠していたわけだ。

――なんか寂しい。

ちょっと弱い部分だって見せてくれたっていいのに・・・・。

・・・あっ！

俺はいいことを思いついたっ。

「蓮さん。ちょっといいですか？」

「あぁ？」

「あれは、あれに乗りましょう！！」

俺が指差したのはロマンチックなメリーゴーランド。

絶叫系駄目だとなると、こうゆうものしかもう残っていない。

蓮はちょっと嫌そうな顔したが、

「分かった」

と頷いてくれた。

――一回だけのってみたかったんだよな。でも男だと抵抗が結構あるし・・・・。

咲哉は意外とロマンチストであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8469f/

恋のドリンクは…

2010年10月12日01時48分発行